

難聴児は表情とサインをどう合致させるのか。

○平島ユイ子

（福岡国際医療福祉大学 言語聴覚専攻科）

KEY WORDS: 聴覚障害 表情 身振り 視線計測

【目的】

相手感情の理解は、表情や身振り、音声のイントネーションからの情報を文脈に合わせて行っていると考えられる。難聴児の場合、音声情報が乏しい場合、表情や身振りから相手感情を推測することになる。表情と身振りサインの意味が一致しないときに、どのように合致させるかを明らかにすることにした。コミュニケーション手段が音声の難聴児（音声群）と手話の難聴児（手話群）の表情と身振りの注視部位を検討した。

【方法】

対象は、難聴児 16 名（6-13 歳）で、知的障害や発達障害を有していないことを確認した。音声群は通常学級に在籍している 4 名（6-13 歳）で、裸耳閾値 65-110 dB で補聴器または人工内耳を装用し、装用閾値 30-50 dB で口形があれば 90-100% の語音聴取が可能であった。手話群は調査時では聴覚特別支援学校に在籍する 12 名（7-13 歳）で、補聴器や人工内耳を装用している。裸耳聴力は 70 dB 以上で、装用閾値は 30-70 dB で口形有の語音明瞭度は 25-100% であった。

方法は、表情と身振りが一致している絵と一致していない絵（図 1）を提示し、絵の人物の気持ちを肯定か否定で二者択一させた。その時の目・口・手への初回注視時間と視線の動きを視線計測装置を用いて求めた。絵は、男女が異なる同じ表情と身振りがある。

視線計測の分析は、図 1 の中から一致課題は笑顔で OK の身振りと怒り顔でバツの身振り、不一致課題は、笑顔でバツの身振り、怒り顔で OK の身振りについて実施した。実施にあたっては所属大学の倫理審査委員会の承認（15-I fh-59）を得た。

【結果】

課題に対する各部位への初回注視時間（sec）は表 1 のとおりである。一致課題では、音声群は視線は目、口、手の順に移動することが多かった。手話群は多くが目を最初に注視したがサインを注視する場合もあった。注視時間と視線の動きについて音声群と手話群の差は確認できなかった。不一致課題は、視線は目、手の順に移動した。手話群も目、手の順に移動した。注視時間と視線の動きについて差は確認できなかった。気持ちの選択では、一致課題では両群とも表情とサインに合った判断していた。不一致課題では、音声群の 3 名がすべて否定と判断し、1 名はサイン通り判断していた。手話群は、7 名が表情から判断し、5 名は課題によっていろいろであった。

【考察】

コミュニケーション手段が音声であっても手話であっても、難聴児が最初に目を見て感情を読み取っていることが明らかになった。その後、手や口を見て情報を統合していた。気持ちの選択は、表情とサインが一致しない場合、手話群が表情を手掛かりに判断していると推察されたのに対し、本研究の音声群は、笑顔で否定のサインを否定と判断していたが、注視の問題ではないことが明らかになった。この理由や学校生活での影響については今後考える必要がある。

図 1 課題絵



表 1 初回注視時間

	一致課題						不一致課題					
	肯定表情・肯定身振り			否定表情・否定身振り			肯定表情・否定身振り			否定表情・肯定身振り		
	目	口	手	目	手	口	目	手	口	目	手	口
音声群	0.27	0.61	0.46	0.76	0.77	0.04	0.8	0.22	0.17	0.89	0.05	0.72
手話群	0.57	0.08	0.56	1.18	0.18	0.01	0.61	0.49	0.15	0.7	0.06	0.22

図 2 表情・身振り否定一致課題の視線

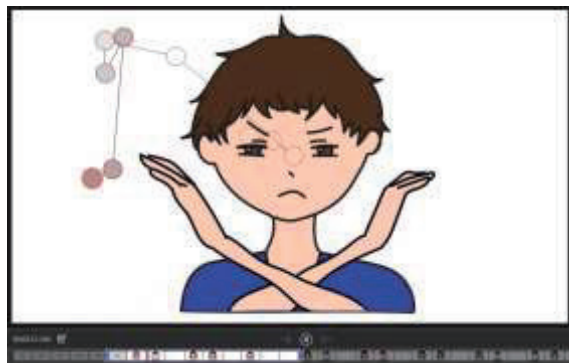
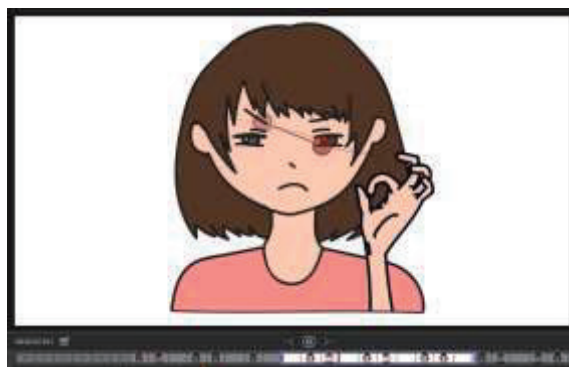


図 3 表情・身振り不致課題（肯定身振り）の視線



(文献)

・櫻庭京子、今泉敏：2～4 歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較.発達心理学研.2001.12.36-45

・Carin H. Wieferrink, Carolien Rieffe, Lizet Ketelaar, et al : Emotion Understanding in Deaf Children with a Cochlear Implant. The Journal of Deaf Studies and Deaf Education 18:175-186, 2012

(HIRASHIMA Yuiko,)